

C-53 布のドレープに対する一考察

東京家政大家政 ○長塚こずえ 木曾山かね

目的 ドレッシーなシルエットをもつ被服を構成するときに、布のドレープ性や、剛軟度は大きく影響すると考えられている。現在これらに関する実験研究の成果は多く報告されているが、我々の被服構成やデザインの参考とするには、身近かな立場からの実験の必要があると考えられたので、日常の被服用布地を用い、先ず現在行なわれている機器による実験方法を行ない、簡単な方法も並行して実施・比較対照しながら考察を行なった。

研究方法 次の材料と実験方法によった。材料は平常用いる綿布5種、毛織物4種、絹2種、麻1種、化学繊維12種を用いた。実験方法はドレープ係数・ノード・剛軟度を求める実験を行なったが方法は次の通りである。1. ドレープテスターによる方法 FR Lドレープメーターを用い、試料の同縁部が垂下してできる輪郭曲線からその材料の投影面積を求めドレープ係数を算出した。2. コップを用いた実験(A) 試料は直径30 cmの円形とし、コップにのせることにより生じるドレープ形状、ノード数を観察した。3. コップを用いた実験(B) 試料は2と同様の円形布であるが、布の中心をスカート作成に一步近づける意味から中心を円形に切り抜きコップに着せ、ドレープ形状、ノード数を観察した。剛軟度はハートルーフ法により求めた。

結果 1. 2. 3の方法のノード数をみると29%の一致をみた。これらは、毛・絹・綿・化繊の軟かい布地で剛軟度も低い布地である。我々が構成で布をえらぶ場合ドレープ性状を求める時は当然軟かい布を求めるので種々なる考察を加えた結果を総合すれば2の簡便な方法でも、構成と結びつけて考える際の参考となりうる実験方法であると思われる。